

THE VANILA

<http://www.thevanila.com/>

Stay or Go 特別編集号 ★第3弾★ 2008.07.24 発行 <http://www.stay-or-go.jp/> SUMIKO

左から
伊藤毅 Ba
渡邊灰二 Vo
中村タロウ G

THE VANILAが走り出した。

今までも現実が覆ってしまう程の濃味をライブで体感することはあった。けれど、「走り出した」と感じたのは「初」だった。2008/5/15(@渋谷La.mama)のライブを観たらそう思ってしまったのだ。

灰二の雄叫びを台詞に、音の渦にづち込まれるようにライブは始まった。

寸文の狂いで激流に飲み込まれそうな勢いある駆け引きとスリル感がたまらない『Up to the Place』。ヴォーカルを導く流れあるギターフレーズが印象的な『Blues on Highway 13』と高速御礼な曲連で畳み掛ける。

「オトナの時間へようこそ。今日はみんなに紹介したいヤツがいるんだ。THE VANILAの新しいメンバー、3人組になって大所帯になってしまったけれど、ギター・中村タロウ!」とMCを挟み『プランニューテイズ』に流れ込んだ。「なってしまった」という灰二の表現に、嬉しさと照れくささの入り混じったようなことばゆい感情が伺えた。ド頭から自己紹介には不足ない攻めつりのギターに「お!なかなか」と構えていた気持ちも解け「確かな鼓動が騒ぎ出す」タロウの加入はそんな手応えがあって笑みがこぼれた。支点が2つよりも3つの方が強度が増すということ以上に、「熱」を感じさせる音。音に後ろ前があるとしたら間違いなく正面を向いている。

「新しい何が起りそうなの気がした 動き出すときに 終わりのない空を抱きしめて」THE VANILAの歌詞が目の前で起きている出来事とリンクしていた。そう、ここから、新しいTHE VANILAの扉が開く。タロウの加入はTHE VANILAというバンドワゴンにギアが入り、アクセルが踏み込まれた瞬間だった。その想いは4曲目の『傷だらけの天使』で更に加速していく。



「これが最後かもしれない」

皮肉なことには以前のTHE VANILAはライブのクオリティが高ければ高いほど、その想いが深まり刹那感が色濃く残った。

「それがなぜなのか?」意識できなましましたけれど、それは灰二の中のサイドブレーキがロックされた状態での全開だったのではないだろうか? エンジンを最高にぶかすことは出来ても進むことはない。そのもどかしさの中に灰二は常に身をおいていたのかもしれない。それはタロウを紹介する言葉の断片にも感じた。

今日のライブ、バンドの方向性が「パチッ」とイメージ出来たからこそ、そんなことを思った。

同志を得たことで灰二は改めて自身の歌詞を確信として、腰をすえて今の時代の音楽として届けられる。タロウの加入は灰二のロックが解除されアクセルを踏み込む準備が整った=バンドの発進を意味したのではないだろうか? 何しろ一番鼓動が高鳴ったのは、タロウが「サンクチュアリ」に居る人間が持つ特有の「狂気」を垣間見せた瞬間。灰二のようにタロウは、「それ」をステージで爆発させることができるプレイヤーなんじゃないか? それを「イカしてる」と表現するなら、ドラムのミンソクは常に「イカしてる」プレイヤーだと思ふ。その意味で「イカした」THE VANILAを見られる日もそう遠くないはずだ。灰二がライブのMCで必ず発する「オトナの時間」という言葉。取捨選択ができる大人だからこそ、フェイクやポーズではない本質が観たいと願う。

歳を重ねる度にシンプルであることの難しさを知る。器用さはいらぬ。多機能でなくていい。かえって本質を見えにくくするから。ギタリストは根っからのギターキッズであればいい。ベーシストは渾身のダウンピッキングで聴かせてほしい。ドラマーは人間味のあるリズムを叩き出し、そしてヴォーカリストは詩に心を宿す。

度肝を抜くステージパフォーマンスが見たい訳じゃない。「ロックぽさ」はいらぬ。ただ「ロック」が観たいだけ。だから、生温さは必要ない。

THE VANILAを突き動かす衝動に今夜も立ち会う。

「Stay or Go」のTHE VANILAに関する記事はサイトでもご覧になれます。アクセスしてくださいね。 <http://www.stay-or-go.jp/>

★THE VANILAまとめ知識★

Q バンド名の由来は…?

A ウルトラマンに登場する「赤色怪獣 バニラ」から。

※ちなみにこのバニラはウルトラマンと戦う前に死んじゃいます。ウルトラマン第19話「悪魔はふたたび」より